

【後期】第3回 1月30日(水) 講演要旨

## DVのない社会をめざして

～DVを知る、気づく、理解する～

【講師】(一社) Turn to smile たんとすまいる

代表理事 宗像 美由さん



### 1 「たんとすまいる」とは

私たちの団体「たんとすまいる」とは、英語で Turn to Smile、笑顔に変わる、笑顔に変えるという意味です。傷つきを持つ人が笑顔に変わり、たくさんの笑顔とつながり、広がってほしいという願いと、どんな経験があったとしても、自分の未来をいっぱい笑顔に変えていこうとする、前向きで軽やかな意思が込められている名前です。私たちは自分の経験から、子どもたちの笑顔を安心して見続けることのできる未来のためにということを活動理念として、女性と子どもの回復自立支援、そして、暴力の連鎖を止めるための活動をしています。具体的には、DVの未然防止、被害回復、再発防止という三つの方向からアプローチをして、デートDV予防啓発、アフターDV回復自立支援、加害更生プログラムと、面会交流支援を行っています。

### 2 DVの現状

DVは、Domestic Violence の略です。私たちは「親密な関係の人への暴力」と定義しています。平成30年度の内閣府の調査によると配偶者からの暴力は、4人に1人です。女性は3人に1人。男性は5人に1人です。そのうち、女性の約7人に1人が、命の危機を感じた経験があると答えています。また、DV家庭の約2割は、子どもへの被害も見られます。

また、交際相手からの暴力の被害件数は、交際相手からは、16.7%。女性は5人に1人、男性は9人に1人です。DVという言葉の知名度は約8割と高くはなってきました。しかし、「デートDV」という言葉の知名度はまだ3割と低い状態です。正確な情報が伝わっていないために、個人の問題だとして捉えられている傾向があります。

警視庁の発表では、DVの相談件数の86.0%は女性で、14.0%が男性です。DVはセクシャルマイノリティと呼ばれる人たちの間で

も起こっています。男女間だけではなく親密な関係の女性同士、男性同士にも起きています。

### 3 DVは「力で人を支配すること」

日本では、DVという言葉が使われるようになったのは2001年にDV防止法ができてからです。まだまだ新しい法律なので、DVについて、なんとなく知っているつもり、わかっているつもりの人が多いです。

DVとは、力で人を支配することです。いろいろなパワーで傷つけ、怖がらせ、言うことをきくようにコントロールすることです。目的を持ってやっている人権侵害、犯罪です。そして、その支配をより強化するために使われるもの、それが暴力です。

DVは、殴る、けるなどの身体への暴力だけではなくありません。わかりやすくするために、身体的、精神的、社会的、経済的の4つに分けられています。相手の安心、自信、自由、自己決定、そして成長を奪うもの。相手の主体性を奪い、その人らしさを否定すること。自分らしく生きることを奪われること。それがDVになります。はたから見て簡単に気づけるものではありません。そして、どの暴力を振るわれたとしても、必ず心の深い部分に傷を伴います。

DVの要因と背景は4つあります。力による支配の価値観、暴力容認意識、ジェンダーバイアス、カップル単位的恋愛観です。

### 4 力による支配の価値観

力による支配の価値観とは、力を持つ人はその持っている力で人を支配してもいいという考え方です。私たちは、力を持っていないという人はいません。例えば、家庭の中で、親から子に力の支配が行われれば虐待です。学校では、生徒同士だと、いじめ。部活では、しごき、スクールハラスメント、アカデミッ

クハラスメントなどもあります。会社ではセクシャルハラスメントやパワーハラスメント。そして、社会ではテロや紛争。これらは、起きている場所や関係性によってわかりやすく名前がついているだけで、どれも根っこは同じです。

DVとハラスメントの共通点は、優位な関係性や権力的な立場を利用している、相手の苦しみを理解できない、昔からあったこと、普通にあること、みんなやっているとっている。悪気はないから、よいと思っている。相手のため、全体のため、世の中のためと思いついでいることが多いです。また、被害を受けている人は、自分が悪いのではないかと思っていたり、被害を訴えられずに一人で苦しんでいるという現状があります。

私たちの社会はこのように、たくさんの力による支配の暴力があります。だから、成長する過程の中で仕方がないと受け入れてしまったり、力で人を支配することは間違ったことでも、特に悪いことでもないというふうに学び、むしろ力を持てば優位に立ち、自分の思いどおりになるということを読んで、自分の価値観に持ってしまっています。関係性によっては、自分の持っている力を意識しないと、人を傷つけることになるということに気づくことが大事です。力で人を支配してもいいという間違った価値観を持っていると、親密な相手へDVをしてもいいという考え方になってしまうということです。

## 5 暴力容認意識

暴力容認意識とは暴力をすること、されることを軽く考えて受け入れるということです。

世の中には、自分が悪かったからとか、あなたのためを思ってとか、愛のムチとか、何か理由があったんじゃないの、そんなふうに考えて、暴力を条件つきで仕方がないと受け入れてしまっている人は多いです。

私たちが暴力を認めてしまっている、その理由は、私たちの日常には暴力があふれて、慣らされてしまっているからです。テレビ、ゲーム、漫画、雑誌などには、暴力に対するハードルが低くなるような表現が多いです。そして、メディアには、男性が暴力的で攻撃的、争いや競争に打ち勝つのが男らしく、逃げたり負けたりするのは男らしくないとい

た間違ったメッセージが多く見られます。しかし、これは、暴力で問題解決をしてもいいという間違ったメッセージを子どもたちに植えつけることとなります。本当は争いを避けるために話し合いで解決したり、その場を離れたり、誰かに相談をしたり、助けを求めたりすることを選択できることが強さであるのに、そのことに触れられることはあまりありません。



■ グループワークの発表風景

## 6 DVは犯罪行為

DVを容認する意識は社会にあふれていません。例えば、殴る、首を絞めることは暴行、傷害、殺人未遂、殺人。物で殴る、物を投げることは暴行、傷害、器物破損。部屋や家を出ようとするのを遮ることは、監禁。セックスの強要は強姦、強制わいせつ。家に押しかける、待ち伏せ、しつこいメールや電話は、脅迫、ストーカー規制法違反。職場などに押しかけて騒ぎ立てることは、名誉棄損。リベンジポルノは、わいせつ物公然陳列罪、名誉棄損などです。

これらの行為は、犯罪なのに、親密な関係の人にした場合は、許されると思われ、許してしまっている現状があります。これがDVへとつながっていきます。誰もが暴力を受けずに安心して生きる権利を持っています。暴力を見過ごさないアンテナを立てることが必要だということに気づいていただきたいと思います。

## 7 男女平等ではない社会に気づく

ジェンダーとは、社会的につくられた性差のことで、一般的には男らしさとか、女らしさとか言われたりします。バイアスとは偏見、

偏った見方のことです。

ジェンダーバイアスの影響を受けていない人は1人もいません。男らしさや女らしさが悪いと言っているのではありません。極端に偏ってしまうと、男のくせに頼りないとか、女のくせにかわいくないとか言って、自分の持っている男らしさや女らしさを押しつけ、それを相手に従わせようとする。それが暴力の引き金になってしまう可能性があるということです。このようにジェンダーの影響が大きいために、男性のほうが暴力を選びやすいということになっています。

また、DV被害に女性が多いのは、ジェンダーバイアスだけではありません。DVの背景には、男性優位につくられた社会構造があります。毎年発表されるジェンダーギャップ指数2017年版では、日本は144カ国中114位でした。そして、G7とロシアを含む先進8カ国の中では最下位です。社会的につくられた男らしさや女らしさといった偏った考え方は、親密な関係の女性を男性よりも一段低く見る意識につながったり、お互いの性別役割を固定することにつながったりするものもあります。女性が働くようになっても依然、家事、育児、介護は女性の肩にかかっています。女性へのDVという暴力、虐待は、女性差別の一形態になります。つまり、社会がDVを生み出しているということです。加害者は、加害者に生まれるのではなく、加害者になるということです。そして結果的に、大切な人を失い、苦しみます。

ジェンダーバイアスは、女性も男性も幸せにしていない。だから、ジェンダーバイアスのない社会が誰をも幸せにする社会になります。

## 8 恋愛や結婚に潜むDV要素

カップル単位的な恋愛観というのは、二人の距離が近づくのはよいことだというふうに考えます。個人よりも二人1セットを優先し、恋愛のイメージや二人のルールが支配を強化していきます。どうしてこんな考え方になってしまうのかというと、これまで学んだ力と支配、暴力容認、ジェンダーバイアスが社会や家庭にたくさんあふれているからです。

そして、結婚は社会的に承認された特定の男女関係だから、1人で1人の人を独占するこ

とも法律で許されている、そんなふうには勘違いする人もいるわけです。カップル単位的な考え方が強い恋愛や結婚は、DVにつながる可能性が十分あるということです。

## 9 DVでない考え方を身に付ける

DV認識力が高まると、自分たちの状態がどんなふうになっているのか、気づきやすくなります。そして、行動を変えることで良い方に修正することができるということです。

ジェンダーフリーとは、性別役割に捉われない、性別で決めつけない、こだわり過ぎないということです。男らしさ、女らしさとか、性の違いに捉われるのではなく、個人の違いを大切にしようとするのが、誰にとっても生きやすい世の中になるのではないかと思います。

シングル単位的な恋愛観は、自分と自分たちの区別をつけた恋愛のことです。ジェンダーバイアスやカップル単位的な恋愛観にしがみつくと、お互いを縛る窮屈な関係性になってしまいます。いろいろな価値観を受け入れて、一人でいても、別々に行動しても、楽しく、お互いが成長し合える関係、精神的、経済的、社会的に自立して、人を信じる力や、自分の人生を自由に選択できる力。そして、それを認める、受け入れる柔軟性が不可欠ということです。

## 10 関係性をよくする7つの習慣

人とよりよい関係を築くには、まず自分自身とよい関係であることが大前提です。そうすると、他者ともよい関係を築くことができます。自分自身とよい関係を築くには、まず怒りのメカニズムを知る必要があります。私たちが怒りを感じる時、そこにあるのは自分の持っている「べき」という考え方です。

私たちは誰でも自分の理想の世界を持っています。そこには、優しい夫、優しい妻、できるいい子ども。そんなふうに、自分を心地よくさせてくれる夢の世界が広がっています。しかし、実際はそうではありません。理想と現実のギャップが大きくなるほど、怒りが大きくなると言われています。例えば、子どもは親の言うことを聞くべき。妻は夫に優しくするべき。愛があれば、多少のわがまは許されるべき。などです。誰一人として、同じ「べき」は持っていません。その「べき」に

こだわって、相手を自分の思うように動かそうとすると、関係性を致命的なものにつな갑니다。そうではなくて、問題が起こったときに、よりよい関係にするにはどうしたらいいのかということを考えて行動することが大切です。

過去と他人は変えられませんが、自分と未来は変えることができます。加害を選ぶ人は、相手を自分の「べき」に従わせようとします。特に配偶者や子どもに対しては、こうしたことは強く出てコントロールしやすくなります。しかし、こういう行動をやめて、関係性をよくする7つの習慣、耳を傾ける、励ます、尊敬する、受容する、違いを交渉する、信頼する、支援する。こんなふうになれば、関係性をよりよくすることができます。

DVは家庭という最小単位の中で起こることです。だから、一番身近な人とよりよい関係なら、虐待や暴力は起こらないということになります。

## 11 相談をされたときにできること

DVをされている人から相談を受けた場合に、私たちができることは話をじっくり聞くことです。そして、暴力を振るわれるのはあなたの責任ではないと伝えてあげてください。次に、適切な情報を伝える。相談窓口を教える、本や情報を与える、支援団体につながるようにサポートするなど、その人が選べる選択肢をたくさん探してあげてください。

また、DVをしている人から相談を受けた場合はまず、暴力を肯定しないようにすることです。もしかしたら皆さんの中には、暴力の話を聞いたときに、暴力を振るわれる人も悪いんじゃないのという考えが頭をよぎるかもしれません。そのときには、自分に二つのことを問いかけてみてください。まず一つ目、暴力を振るう権利がある人、振るわれてもいい人がいるのかどうかということです。そして二つ目、その暴力は相手が誰でも許されることなのかということです。恋人同士だけ、夫婦だけ、親子だけ、家族だけ、学校だけ、部活だけ、会社だけ、国だけというように、限定つきで許される暴力行為は一つもありません。暴力は誰に対しても、どんなときでも犯罪行為であり、人権侵害です。どんな理由があろうと、決して許されるものではあ

りません。暴力以外の選択肢は絶対にあります。しかし、それはその人の全てではなく、選んだ行為の一つです。だから、人間としての価値と切り離し、暴力以外の選択ができるように支えてあげてください。

そして、どちらの場合にも共通することですが、一人で抱えない。特に専門家につながることを必要とします。江東区には相談窓口「女性のなやみとDVホットライン」があります。匿名で構いません。秘密は守られますので、ぜひ気軽に相談をしてみてください。

## ◆ジェンダーギャップ指数とは

国ごとの男女格差（ジェンダーギャップ）を測る指数。略称GGI。世界の企業や団体が加盟する非営利の公益財団、世界経済フォーラムWorld Economic Forumが2005年から実施し、『世界男女格差報告書』The Global Gender Gap Reportにおいて毎年発表している。GGIは各国の資源や機会が男女間でどのように配分されているかについて、以下の4分野で評価している。(1)経済活動の参加と機会（給与、雇用数、管理職や専門職での雇用における男女格差）、(2)教育（初等教育や高等・専門教育への就学における男女格差）、(3)健康と寿命（出生時の性別比、平均寿命の男女差）、(4)政治への関与（議会や閣僚など意思決定機関への参画、過去50年間の国家元首の在任年数における男女差）。指数の算出には国際労働機関（ILO）、国連開発計画（UNDP）、世界保健機関（WHO）などの公的データが用いられる。指数は0から1の数値で表され、0が完全不平等、1が完全平等を意味する。各国をランク付けするため「男女平等ランキング」ともよばれる。

（出典：日本大百科全書）